

二ツ小屋沢

LⅢ

一九八二年一〇月一〇日

不動尊の横に車を置いて、沢に入る。水はだいぶ冷たくなってきたが、天気は良く、寒いとは思わない。身仕度をして、八時ちよつと過ぎに出発。

樹林帯の中である。クリの実が落ちていて、秋を感じさせる。

滑りやすいナメを過ぎた所で、沢の様相が険悪化してきた。沢がぐつと暗くなつて、廊下状となり、砂防ダムが二つ。左岸から高捲いてゆくと、この分では期待がもてそうだと思つたのに、この先は全く平凡となつてしまった。

八時二五分、左岸の樹林帯にふと

目をやると、カモシカが二頭じつとこちらを見ているではないか。向こうの方が先に我々に気が付いていて、こちらの動きを見ていたようだ。こちらもち立ち止まり、じつと見ていると、ゆうゆうと立ち去つていった。

沢は依然平凡。しかもカレ沢となつてしまった。ようやく出てきた五匹の滝は、簡単に直登。すぐ切通シ沢出合。

切通シ沢出合には、自然石か人工の記念碑なのか判断のつきにくい、高さ五〇センチ程の石がある。片面だけが平らで、人工物のような気もするが、そうだとすると、誰が何の

ために置いたのだろうか。

左俣(二ツ小屋沢)に入る。ブッシュがひどくなる。アケビをみつけたので、木登りをして採つた。秋の沢登りには、山の幸にも魅力がある。

依然平凡な沢筋が続く。右岸に踏跡が見えてきた。はつきりした踏跡である。どうやら沢ぞいに走る農業



カモシカ

用水の取水パイプの管理用に使われているらしい。よく手入れされている。二本のパイプのそれぞれの取水口まで続いていた。

沢は依然平凡なままもう終わりに近づいた。ブッシュもひどくなり、尾根に出ようと、右手にヤブをこぐ。すぐに廢道に飛び出す。県境後線

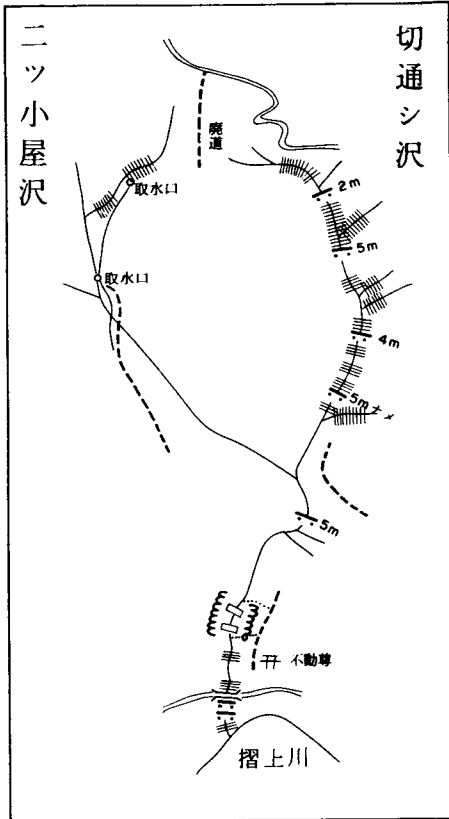
走る林道は間近であった。

(記)

「タイム」 出合(八〇五) ↓ 切通シ

沢出合(九〇五) ↓ 遊行終了(一

二〇四〇)



針葉の樹木③

ゴヨウマツ(マツ科)

摺上川流域で見られる数少ない針葉樹の一種である。標高の高い尾根上に列状になっていることも多い。

葉が五個づつ束になっている

ところがこの木の名前の由来となっている。地方によっては、ヒメコマツ、キタゴヨウなどと呼ばれている。亜高山帯に自生するハイマツも、五葉である。

材は建築材として用いられるが、木目がつまっていて狂いが少ないために、ピアノの響板としても用いられている。ちょっと変わった利用例といえるかもしれない。

(大西)